

栗林公園でのエコツアープログラム ～学生目線から～

地域ガイド／全国通訳案内士 横山正太郎

[司会：本城ゼネラルマネージャー]

横山先生から観光のお話をさせていただきますけれども、その前に経済学部の方から導入部としてのお話があります。そのあと横山先生にお願いいたします。

[香川大学経済学部・瀬戸内圏研究センター教授 原直行]

皆さんこんにちは、経済学部教員の原です。私は瀬戸内圏研究センターにも所属しております。専門は観光でして、特にエコツーリズムやグリーンツーリズムを使った地域振興を研究しております。

経済学部には「観光・地域振興コース」といって、観光と地域振興を学ぶコースがあります。その学生を対象にエコツーリズム論という授業を行っております。今まで、その授業は主に教室での講義や大学のキャンパス内でエコツアーを作るといったものでした。今年度は思い切って、「栗林公園でエコツアーを作らせたならどうなるのか」ということにチャレンジしました。

私はもともと農業経済が専門なので、造園や庭園というものに全くの専門外です。私自身もエコツーリズムのガイドをしたことがありますけれども、やはり専門家に入ってもらった方が良く、今日講演をされる横山先生にお願いいたしました。今、横山先生と一緒に「学生自身が栗林公園でエコツアーを作る。それを学生自身がガイドになって他の学生に対して発表する」という授業を作っているところです。明日の午前中と来週の木曜日の午前中が本番になりますが、今夜から雨が降るとのこと、明日は学生達に雨の中でガイドをしてもらうことになりそうです。

横山先生のお話はそのことが中心になります。それでは横山先生、よろしく申し上げます。



今日はこのような機会をいただきまして、誠にありがとうございます。ご紹介いただきました横山昌太郎です。三豊市から参りました。どうぞよろしくお願いたします。

先ほど原先生からお話がありましたように、私は原先生からのご依頼により、今回の授業のお手伝いをさせていただくことになりました。

簡単に自己紹介をさせていただきます。生まれは広島県の山奥の庄原という所です。そして、三重県で育ちました。大学では林学、森のことを勉強しておりました。研究者になりたかったのですが、いろいろあってD1で中退し、当時の環境庁に入り国立公園のレンジャーとして、9年間霞が関と現地を行ったり来たりしながら、国立公園管理と野生生物管理を主に担当しておりました。

9年間の環境省勤務の後、ピッキオという森のガイドをしている会社に転職しました。ピッキオは長野県の軽井沢町にある星野リゾートの子会社です。そこで10年間森のガイドを行いました。環境省を辞めたのは「法律の規制で自然を守ることも大事だけれども、自然を大切にしたい気持ちというものもしっかり育てて行くことがより大切ではなかろうか」と考えるようになったことです。理由のあと半分は結構ブラック企業的な働き方が嫌になったことです。本当にひどくて法律を作る時などは朝9時から翌朝5時まで仕事をずうっと1週間続け、残業代も出ないというような状況でした。

ピッキオで10年間働いた後、「いろいろな仕事をしながら生計を立てて行きたい」ということから、平成29年にご縁のあった香川県に移住してきました。そして、今、森や地域のガイドやエコツアーリズムのアドバイザー、地元ラジオ局のブログライターをしたり、宿泊施設の清掃をしたり、草刈をしたり、いろいろな小商いをしながら暮らしております。

今日のお話の中心はガイドやエコツアーリズムのアドバイザーです。エコツアーリズムって聞かれたことがあるかも知れませんが、まだ馴染みのない言葉だと思います。そこで、前半にエコツアーリズムのお話をさせていただき、後半に学生さん達と作ったプログラムと授業の内容を紹介させていただきたいと思っています。

自己紹介

- ・広島生まれ、三重育ち
- ・名古屋大学農学部林学科D1で中退
- ・H9～H18 環境省・自然保護官
- ・H18～H28 森のガイド
(長野県・星野リゾートピッキオ)
- ・H29 香川へ移住。
様々な小商いで生計を立てる。
(例)森や地域のガイド、エコツアーリズムアドバイザー、地元ラジオ局のブログライター等、宿泊施設の運営、草刈り等

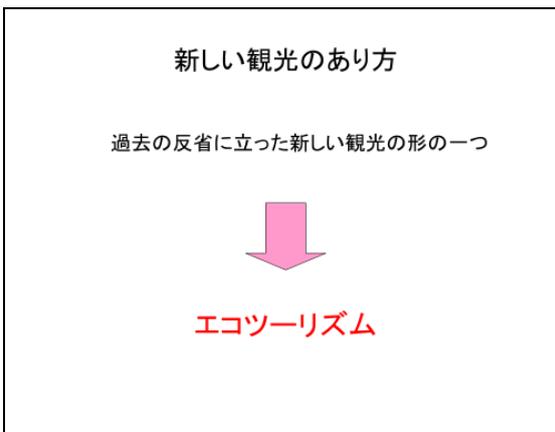


「ちなみにどうでしょう。エコツーリズムという言葉自体を聞いたことがあるという方、何人ぐらいいらっしゃいますか。恐れ入りますが挙手をしていただけませんか」。(大勢が挙手)「すごいですね。ありがとうございます」。「では実際にエコツアーというものに参加したことがあるという方はどのくらいいらっしゃいますか」。(1人)「あら、原先生のみ。ありがとうございます」。「そうですね。エコツアーという言葉は聞いたことがあ

るけれども、実際に参加したことがあるかと言うと、ない方が多いですよ。ただ、10年前にはエコツアーという言葉自体、聞いたことがないという人がほとんどでした。エコツアーという言葉を知っている人でも、「エコツアーとはあれでしょう。海でゴミ拾いをするやつでしょう」という具合です。そういうイメージもあったのですけれども、このエコツーリズムというものは、ざっくり言うと昔ながらのツーリズムに対する反省に立った新しい観光の形です。

世界的には、1982年にIUCN(International Union for Conservation of Nature and Natural Resources)の会議でエコツーリズムが自然保護の資金調達機能として有効とされました。昔から自然保護というものはお金にならないと言われていましたけれども、「いやいやそんなことはないよ。自然保護のために自然を保全しながらお金を稼げるエコツーリズムという考え方があるよ」と言うことが、40年近く前に世界国立公園会議の場

で提唱されました。この後に紹介しますが、日本でも小笠原や屋久島、軽井沢などでその取り組みが進みました。そして、2002年にはカナダ:世界エコツーリズムサミットが行われました。



- エコツーリズムの歴史**
- 1982年 IUCN 第3回世界国立公園会議
「エコツーリズムが自然保護の資金調達機能として有効」
 - 1985年 WTO(世界観光機関)、UNEP(国連環境計画)が
「観光と環境に関する共同宣言」において「環境の保護と改善は観光の調和の採れた開発にとって基本的条件」とする。
 - 1989年 小笠原ホエールウォッチング協会が発足
 - 1992年頃 日本でも民間事業者が活動開始(屋久島、軽井沢、知床など)
 - 1998年 日本エコツーリズム推進協議会(現:日本エコツーリズム協会)設立。
 - 2002年 カナダ:世界エコツーリズム・サミット

日本を例にとるとイメージしやすいのが特に高度経済成長期です。国民がお金を稼げるようになって、観光がようやく一般化してきました。大衆化した観光というのは、いわばマスツーリズムだったわけです。これは熱海市のインフォメーションセンターのホームページからいただいてきた写真です。このように温泉旅行に行っ、お膳を並べて皆でドンチャン騒ぎをするというようなスタイルが一般化してきたのです。しかし、これには大きな問題がありました。どうしても同じ場所と同じ時期に集中すると、日本には旅の恥はかき捨てといった風潮があり、旅先で何をしても良いということでモラルに欠けた行いをする事などです。今でこそ日本人はマナーが良いということで世界からも認知されてきており、自負もしているところですが、ほんの1980年代ぐらいには世界中で新しい野蛮人が生まれたと言われていました。

かつての観光: マスツーリズム・団体旅行

高度経済成長により、
 ・観光が一般化、大衆化した(マスツーリズム)。
 ・主な観光スタイルは団体旅行。



※熱海市インフォメーションセンターHPより

↓
問題点

・同じ場所・時期における集中
 ・旅行者のモラル

そのような状況から、自然環境に影響が出ている事例です。これは福島の尾瀬です。今では木道だけを歩くようにしていますが、1960年代にはハイカーが木道のない所を踏み固めて湿原の植物を荒らしていました。写真は同じ場所の荒廃した写真と復元した写真です。このように人が集中することで自然環境が荒らされていました。

観光地における問題事例

尾瀬(福島県、群馬県等)

※ほぼ同視角から撮影




荒廃したアヤマ平 現在のアヤマ平

左の写真は1960年代(?)ハイカーによる踏み荒らし

もっとひどいものはカタクリの盗掘です。昔はカタクリの根から片栗粉を作っていたぐらいですから、たくさんあったのですが、至る所で抜き取られて無くなってしまいました。カタクリはきれいな花を付けますが、葉っぱが出て7年目か8年目にならないと花が咲かないというほど成長の遅い植物です。

観光資源の損壊

盗掘



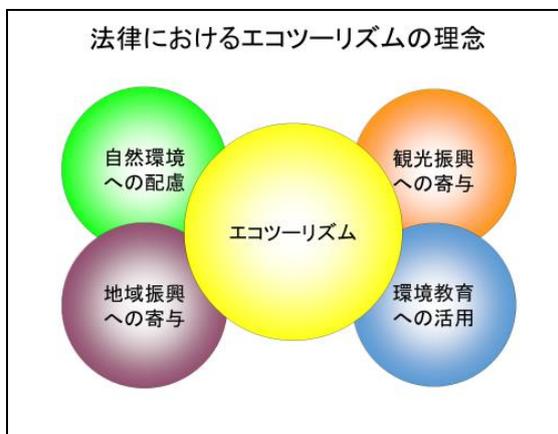

カタクリの採取痕

この写真は観光というよりはイベントですけれども、東京の代々木公園です。人がいっぱい来てごみを放置しています。

海などでも、公衆トイレの横にこのようにごみを捨てて行ってしまったり、観光やそれにとまなう活動によって、大きな影響が出ています。

少し古い写真ですけれども、これは富士山です。今はありませんが富士山の白い川というものです。ここにシュエと線が入っていますね。なぜ白い川ができていたかと言いますと、これはですね。写真をアップするとこのような感じになっています。何か白いフアフアした物、ティッシュペーパーみたいな物が落ちていますね。これはここに山小屋があって、富士山に登った人達が用を足したトイレのものです。富士山は日本一の山ですからたくさんの方が登りますけれども、山頂には下水道がありません。このため、山小屋のタンクに溜めておきます。そして、冬になり山小屋を閉める時に溜まったタンクからドバッと下に流してしまうのです。そうするとトイレトーパーなどがこのように白い川となって残ってしまうというようなことがありました。今ではこれが改善されて、場所にもよりますが、重油で全て燃やしてしまうとか、トイレのタンクをカセット型にしてヘリコプターで運ぶとか、そのようにして対処しています。このように観光に伴う活動で環境への影響が非常に大きくなってきた反省を踏まえて生まれてきたのがエコツーリズムという考え方です。

エコは生態系のエコロジーから来ている言葉ですけれども、最近では環境と同義に使用されることが多くなりました。エコツーリズムの理念としては自然環境への配慮をしつつ、なおかつ地域振興、地域を活性化しようということ。そのうちのひとつとして観光振興、さらにはそのような取り組みを通じて環境教育へも活用しようということを法律で定めています。



皆様ご存知ですか。日本にはエコツーリズム推進法という法律があって、国としてエコツーリズムを推進しようということが決まっています。平成 19 年に法律ができて、図のような定義で推進して行くことが定められています。

「実際にどんな事例があるのか」と言うことですが、いくつかご紹介したいと思います。

これは私が 10 年間務めた軽井沢の会社の事例です。このような森が全国各地に「野鳥の森」とか、「小鳥の森」といった名前で指定され保全されています。その森の中をガイドがお客様を案内して、森の植物とか、動物達の生態を解説しながら歩いて行きます。その中には、例えば夜しか見ることができないムササビもあります。これは長野県にたくさん棲んでいるツキノワグマです。私が勤めた会社ピッキオではツキノワグマを無駄に殺すことなく共存しようということで、ツキノワグマの保全活動なども行っていました。

余談ですが、写真のムササビです。このツアーは夏にやっているのですけれども、ツアーが開催されればムササビが飛んでいるところを見ることができる確率が 95%ほどあります。ですから、ムササビを見たことがない方はぜひ軽井沢にお越し下さい。「ちなみにムササビの大きさはどれぐらいだと思いますか。頭のてっぺんからしっぽの先までどれくらいでしょうか。これくらいかなという感じで、皆様、両手を広げて表現して下さい。どうぞ、やってみて下さい」（各受講者が手を広げた）。「ありがとうございます。ムササビはこれくらいあります。80cm ほどあります」（両手を広げて）。おそらくリスの仲間では世界一と言って良いぐらいの大きさです。一番大きいものはインドネシアのオオアカムササビですけれども、数センチしか変わりません。皆様のイメージに多いモモンガはちっちゃいですね。このムササビは日本固有種ですし、こういうものが 95 パーセントの確率で見られるということになれば、国内だけでなくインバウンドの観光資源としても有用だと思います。

法律におけるエコツーリズムの定義

エコツーリズム推進法(平成19法律第105号)・第2条第2項

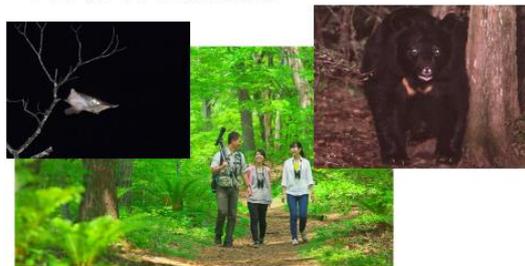
この法律において「エコツーリズム」とは、観光旅行者が、**自然観光資源について知識を有する者**から案内又は助言を受け、当該**自然観光資源の保護に配慮**しつつ当該自然観光資源と触れ合い、これに関する知識及び理解を深めるための活動をいう。

エコツーリズムの事例



軽井沢町(長野県)

- ・ 民間企業(星野リゾート・ピッキオ)による森のガイド、ツキノワグマの保護管理



写真はピッキオHPより

ここは小笠原です。先ほどエコツアーの歴史の中で小笠原に触れましたけれども、日本のエコツアー、エコツアーの先駆けです。特に春のホエールウォッチングです。クジラを見るツアーなどが行われるのですが、クジラを見るために必要以上にクジラに近づくなどして、クジラの生態を脅かす恐れや事故が起こる危険があるということで、小笠原では民間の事業者さん達が自主ルールを作っています。このようにクジラから300m以内では減速しましょう。この赤いエリア100m以内には近づかない、入らないようにしましょうといったルールを作り、クジラの生態に配慮しながらツアーを行うというような取り組みを行っています。

これはインバウンドで非常に有名になりましたけれども、飛騨市の「美ら地球(ちゅらぼし)」という所です。「SATOYAMA EXPERIENCE」ということで、外国の方を対象にサイクリングをして、地域のいわゆる何も言われていないと言われる所の田んぼや畑、昔からある酒蔵などを案内するというツアーです。やはり、欧米の方の利用が多いようです。ここの代表の山田さんに話を聞ききますと、「もちろん田んぼや畑などに興味を持っていただけます。でも、すごく興味を持ってもらえるものがあるのですよ」と言うのですね。「それは何か」とお聞きしましたら、「実は田んぼとかに行くと、このような所にアマガエルがピョコッと座っている。欧米の人達にとってはそれがすごく受けるのですよ」といった話をして下さいました。このように何気ない普段のものを案内していくことで、非常に人気の高いツアーになっています。

小笠原諸島(東京都)

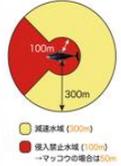
- 小笠原ホエールウォッチング協会等、団体、個人の様々な団体がガイドを実施。最も人気があるツアーの一つ「ホエールウォッチング」に関しては、鯨の生態を保全するため我が国でいち早くルール作りを行った。




※画像は環境省、小笠原村HPより

小笠原におけるホエールウォッチング ～ 自主ルールの策定 ～

ホエールウォッチング自主ルール



● 減速領域 (300m)
● 進入禁止水域 (100m)
→マッコウクジラの場合は500m

制定 : 小笠原ホエールウォッチング協会
改定年月: 1997年1月

適用船種: ザトウクジラなどのヒゲクジラ種目全種とマッコウクジラ
適用海域: 小笠原諸島の沿岸20マイル以内

20t未満の小型船の場合(要約)

- クジラから300m以内を低速水域とする。
- クジラから100m以内は進入禁止水域とする。
ただし、マッコウクジラについては250m。
- クジラの進路や行動を妨げないようにする。



この自主ルールに準ずる、特別学術研究、特別取材の船舶は青色の特別旗を掲げています。

飛騨市(岐阜県)

民間団体(海ら地球(ちゅらぼし))による各種ツアー。特に外国人を対象とした「SATOYAMA EXPERIENCE」(MTBを利用した里山サイクリングなど)が人気を博している。




※画像はSATOYAMA EXPERIENCE HPより

そのエコツアーリズムについて先ほどの法律を見てみますと、日本のエコツアーリズムの定義は、「観光旅行者が自然観光資源について知識を有する者から案内又は助言を受け、当該自然観光資源の保護に配慮しつつ当該自然観光資源と触れ合い、これに関する知識及び理解を深めるための活動をいう」となっています。ポイントとして、ここに赤く書いてありますけれども、「自然観光資源について知識を有する者から案内又は助言を受ける」ということです。この「知識を有する者」というのが、一般的にガイドと呼ばれる人達だと思います。

我が国の法律上の定義としてエコツアーリズムにはガイドさんが必要不可欠になっています。このため、ガイドさんがいるツアーというものがエコツアーリズムであって、エコツアーの楽しみには、そのガイドさんが大きなポイントになります。

では、「このガイドさんが何をするのか」と言うことですが、図は栗林公園やそのあたりにたくさんいるシジュウカラという鳥です。ここにお客様がいます。もちろんお客様が栗林公園を歩いていて、詳しい人だったら「あ、シジュウカラだ」と分かる人もいますけれども、ほとんどの人はお分かりになりません。ところが、ガイドさんがいると、例えば、鳥を見付けると、「あそこに鳥がいますよ」と教えてあげる。そして「あの鳥はシジュウカラという名前ですよ」と、さらに「あのシジュウカラという鳥は私達の身の回りにも結構いて虫などを食べているのですよ。くちばしが細いですね。細いくちばしはイモムシなどをつまむのにとても都合良くできています」などとシジュウカラの生態を解説してあげる。このことによって、「お客様にとって、ただの小鳥がシジュウカラになって、虫が好きで、虫をつまむのに都合の良いくちばしを持っている」というように、だんだんお客様の理解を深めて行きます。すなわち、ガイドをインタープリターと書きましたけれども、このシジュウ

法律におけるエコツアーリズムの定義

エコツアーリズム推進法(平成19法律第105号)・第2条第2項

この法律において「エコツアーリズム」とは、

“観光旅行者が、**自然観光資源について知識を有する者から案内又は助言を受け**、当該自然観光資源の保護に配慮しつつ当該自然観光資源と触れ合い、これに関する知識及び理解を深めるための活動をいう。”

ガイド



我が国におけるエコツアーリズムにおいては必要不可欠であり、エコツアーの楽しみの大きなポイント

ガイドの役割



対象

ガイド(インタープリター)

お客様

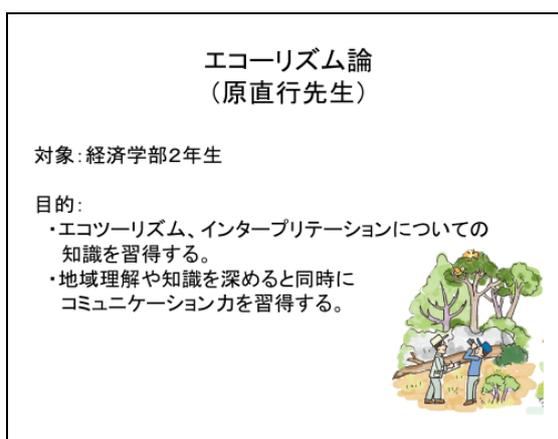
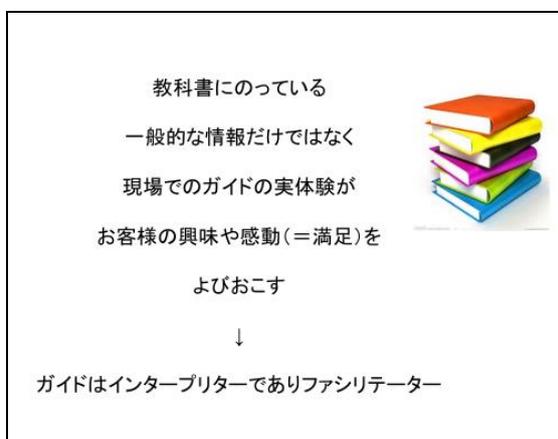
対象の背景にある、見ただけでは分からないものを解き明かし(interpretation) 資源の重要性などを伝えるとともに、お客様の楽しさや感動を創り出す

ウカラの背景にある、見ただけでは分からないものを解き明かします。

このことを自然解説の世界ではよく interpretation という言葉を使います。それを行う人ということでインタープリターと言います。Interpretation の直訳は通訳ですね。英語を日本語にするというようなことですが、「自然解説の世界では見ただけでは分からない自然のメッセージを訳して、一般の方にも分かるように、理解できるように伝える」という意図からこのインタープリターという言葉をよく使います。このようにして、対象の背景にあるところの見ただけでは分からないものを解き明かし、自然観光資源の重要性などを伝えて、お客様の楽しさや感動を創り出します。これはお金をいただいて行うツーリズム、ツアーですから、単に教育だけをしている訳ではありません。お客様に学ぶ楽しみを伝えながら、お金を払って満足していただけるだけの楽しさや感動を作り出して行くということが、このガイドの大きな役割になります。

ガイドの役割は先ほどのシジュウカラという名前に教科書や図鑑に載っているような一般的な情報を添えて伝えるだけでなく、現場でのガイドの実体験などを伝えることがお客様の興味や感動を呼び起こすこととなります。このため、自分が現場に行っても不思議に感じたことや驚いたことなどをたくさん持っていることが重要になります。今回、学生さん達にガイドのプログラムを作ってくださいと高いハードルがありました。それは、学生さん達に現場の実体験を通じて、そのことを理解していただくということです。

実際の授業は先ほども原先生からお話がありましたように、エコツーリズムについて、インタープリテーションの知識やコミュニケーション力を習得するというところまで行ってきました。最初に室内講義として、原先生からエコツーリズムのお話をさせていただきました。その後、私からインタープリテーションということで、ガイドの一番大きな役割の部分を2回に分けてお話をさせていただきました。



ここで私が思案したのは、経済学部 of 学生さんなので自然環境保全などにある程度知識があっても、エコツーリズムやインタープリテーションを学びたいわけではないのだから、どのようにして意識を持ってもらうか、意欲を持ってもらうかということです。そこで、「ガイドって儲かるよ」というところから入ろうと考えました。



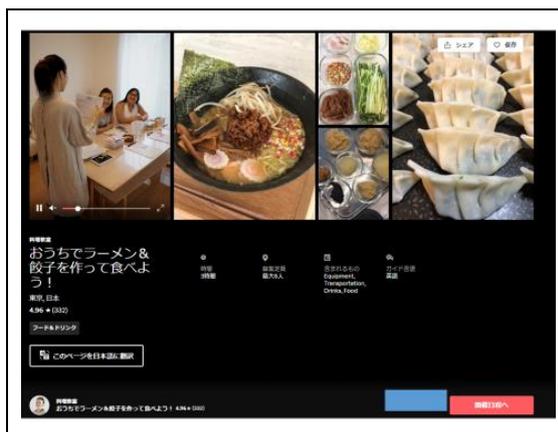
室内講義

10/3 エコツーリズムとは(原先生)

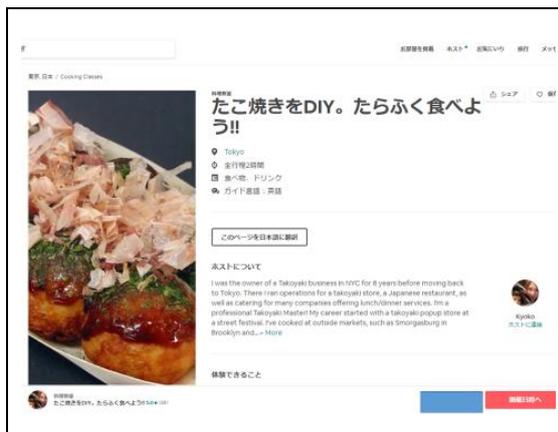
10/10 インタープリテーション①(横山)

10/17 インタープリテーション②(横山)

これは Airbnb という民泊や体験などをたくさん売り出している世界最大手のサイトです。その非常に人気があるツアーのページです。この yuca さんという女性が6年ほど前から行っている大変人気のあるツアー、ツアーと言うか体験ですね。「お家でラーメンと餃子を作って食べよう」というものです。ざっくり言うと、yuca さんと一緒にスーパーに行って餃子とラーメンの材料を買って来て、皆で料理をして食べようという3時間のツアーです。これが、ほぼ毎回満員なのです。「最大6人ですけれども、いくらぐらいで販売されていると思いますか。皆様、頭の中で考えてみて下さい。皆様だったら逆にいくらぐらいならお支払いされますか(誰も発言なし)。これは海外の人向けの値段なので、国内の人が参加する場合と乖離があるのですけれども、お一人9,720円です。先日見てみたら、週に3日の毎回6人がほぼ満員で一か月間全て埋まっていました。そのように考えると、1人1回1万円。6人で6万円。週3日で18万円。月に4週あるから72万円。ラーメン作って毎月70万円儲かるということですね。



これはタコ焼きです。「タコ焼きを作って食べよう」と言うツアーです。2時間で5,500円のガイドです。このようなツアー、体験というものは、「これから世の中がモノ消費からコト消費へ」と言っていることもあり、特にインバウンドの観光には情報が非常に大事になって来ます。このように体験と情報をセットにすると、より付加価値の高いものを提供できるし、皆が儲かる。これからは副業も兼業も行って良くなるのだから、「ぜひガイド業を頑張って勉強しませんか」とか言ってみましたけれども、案外反応が薄かったですね。



今、日本は失われた20年という話もありますけれども、海外から見て日本は物価が非常に安くなっている面もあるので、日本で暮らして行く分にはガイド業を一つの副業として持っておいても良いのではないかと思います。今日は海洋コースの皆様もいらっしやっているようなので、ぜひ、興味を持ってみて下さい。

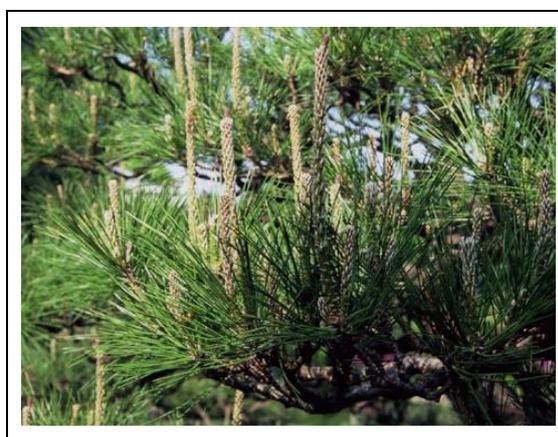
インタープリテーションはお客様あつての仕事です。いくら「背景を解き明かす」と言っても、あまりにも専門的な「シジュウカラのDNAがどうのこうの」と言い出しても、一般の方には分かってもらえません。では「どのようにしたら伝わるのだろうか」ということを事例でお話いたします。

私は自然系のガイドですから、このような鳥ですね。これから春になったら鳥がさえずってきます。いろいろな所でさえずりが聞こえるようになります。これはコマドリといって、日本三鳴鳥、三鳴鳥の「めい」は鳴くという字を書きます。鳴き声にウグイス、オオルリ、コマドリがありますけれども、鳥ってなぜ鳴いているのでしょうか。春の森を歩いていたら鳥が鳴いています。奥様方などは「ああ良いわね。のどかで。鳥達も楽しそう」と言うことでしょうか。この鳥、なぜ鳴いているのでしょうか。ちなみに鳴き声でオスカメスカだいたい分かりますね。ウグイスはオスが鳴いています。メスは基本的に鳴かないので

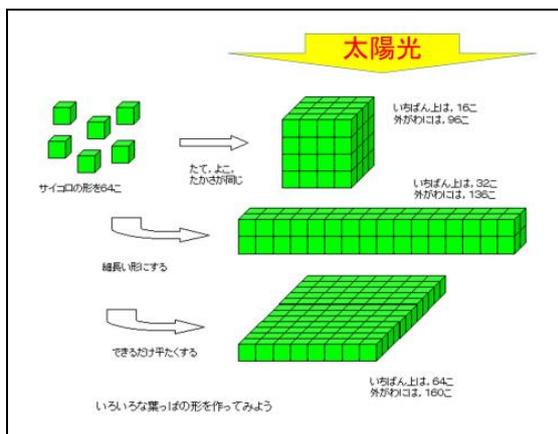


す。ここにも訳があって、鳥達のさえずりというのは春から夏にかけて聞かれる鳴き声ですけれども、基本的に求愛の声なのです。だからオスがメスに「僕とペアになって。パートナーになって。結婚して」と言うような婚活の声なのです。また、鳥にもよりますけれども、相手ができたオスは自分達ペアの縄張りを守らなければなりません。もう少し厳密に言うと、自分のメスを他のオスに取られたくないから、自分の縄張りを守るために、「ここは僕の縄張りだぞ」とオスが叫んでいるのです。これが鳥のさえずりなのです。だから「ああ、のどかね」と言うどころではなくて、もう鳥は必死なのです。「お嫁さん来て、お嫁さん来て」、「僕の所には来るな」とかと言うように必死で叫んでいるのが、鳥達のさえずりだったりするわけです。こういったところも一般の方々にとって「ああ、そうだったのか」と言うような気付きになります。そうすると見る眼が変わって来たりします。「鳥達も大変ね」という気持ちになってくるのです。

また、もっと身近なものですけれども、これは栗林公園にも多い松の葉っぱです。栗林公園の地面は砂地ですよ。「砂地で水気もあまりないのに、なぜ松は頑張ってるのだろう」と感じたことがある方もいらっしゃると思います。実際に松は荒地ややせ地でも育つことができる木なのです。



その秘密の一つはこの葉っぱにあります。松の葉は広がった形ではなくて針のようになっていますね。説明のためにモデルを作ってみます。このさいころの1つが葉っぱの細胞として考えて下さい。このように立方体の形になっている時と細長くなっている時、広がっている時の光を受ける面積と外にさらされている細胞の数を見ます。そうすると、松の葉っぱのように細長いものは外側が少なく乾燥には強いのですけれども、光をあまり受けることができません。一方、広葉樹のように広がっている葉っぱだと光をたくさん受けることができるけれども乾燥に弱い。このように「松の葉っぱ一つをとってみても形には意味があるのですよ」という話などを通じてインタープリションを行います。

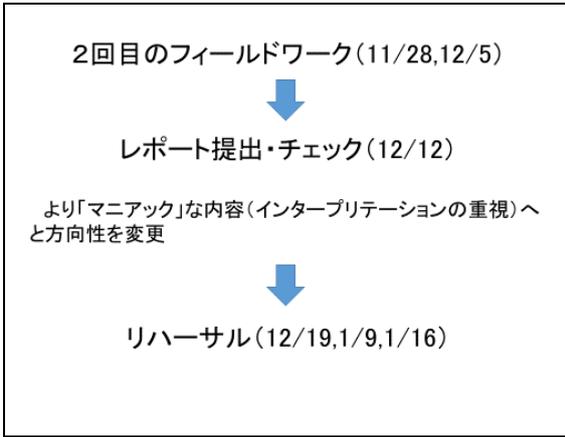
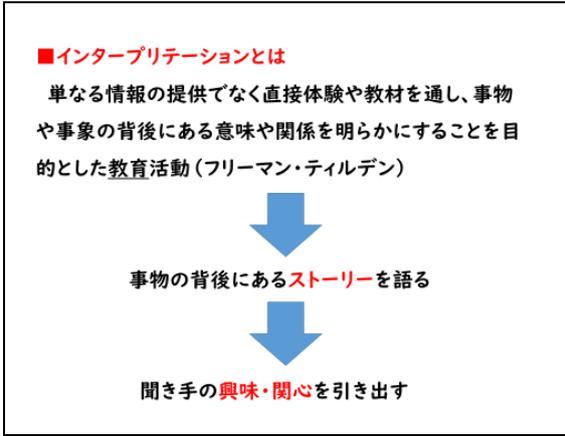


インタープリテーションとは「単なる情報の提供ではなくて、直接体験や教材を通して背後にある意味や関係を明らかにすることを目的とした教育活動」と言うことです。知識を細切れに伝えるのではなくて、「あるストーリーを持って伝える」ということです。それをプログラムもしくはアピールと言ったりします。基本的には、お客様の興味・関心を引き出しながら、プログラムを作っていくことを学生さん達にさせていただいたのですね。

ガイドとしては単に図鑑やインターネットで調べて、そこで知った話を伝えるだけでは感動といったものを呼び起こせません。そこで、自分達で歩いてネタを探してもらうことにしました。この写真は栗林公園の奥の方です。鯉がたくさんいる所で「なぜこのようにいるのだろうか」と話をしたりしながら、学生さん達に自分自身の眼でいろいろと見てもらいました。

このようなことを2週に渡って行って、「どのようなプログラムを作るか」ということをレポート提出の形でチェックさせてもらいました。1回のツアーを1班3人一組で30分のプログラムを作ってもらうことにしました。まず1回目のレポートの結果ですけれども、私の伝え方が良くなかったのか、解き明かしというよりは栗林公園に初めて来た人達に向けて、「名所を案内します」とか、「こんな珍しい松があります」という名所め

ぐりのようなツアーになっていました。これだとリーフレットを見ても良いのではないかと。しかも、30分間話すということあまりイメージしていなかったみたいで、レポートを見ると、「これ絶対30分持たない。5分で終わるよね」みたいなものも少なからず見られました。やはり1番のポイントとして、原先生が気にされていたのはインタープリテーションということが理解されていないということ。これには実体験がないということです。学生さん達は中学、高校と通して林間学校などに無理やり連れていかれたということがあったとし



でも、自分達でガイドを雇ってのツアーなどをしたことがありません。このため、面白さを実感していないものを作ることが難しいのだと思います。そこで、物事を解き明かしていく楽しさ・面白さを何とか感じてもらいたいということで、原先生からご提案いただいたのがこちらです。

ご存知ですか、ブラタモリ。最近人気ですね。しかも、なんと香川大学の長谷川先生が案内人として出ていらっしゃった回のビデオです。「なぜさぬきうどんが香川県の名物になったのか」ということをジオの観点、すなわち地形などから解き明かしていきます。このツアー番組を授業の中で見ていただきました。何気ないところから始まり、「実は香川県は中国山地と四国山地と讃岐山脈に阻まれて雨が降らないから小麦がよく育つのだ」。



。「その小麦が育つ地質とはこのような川の扇状地にあるのだ」と言うように、次々と繋がって解き明かしていく。その面白さをこのブラタモリを例に見ていただきました。

その上で、内容的に良くなかったところについては内容を変え、良かったところについてはより深堀をするという形で、もう一度現地を見ていただき、「マニアックな方向に行こう」、「マニアを対象にしたプログラムを作って下さい」、「インタープリテーションして下さい」ということで、皆様に考え直していただきました。そして、作り直したレポートのチェックをした上で、昨年末から2班ずつリハーサルを行っております。

原先生と私とでそれぞれ分かれてリハーサルを行っているのですが、私の方の班ですが、テーマとしてこのようなものがありました。「実は香川県には火山があった!?! ~栗林公園にある石の秘密~」、「水が作る栗林公園 ~伝統ある日本庭園へようこそ~」、「栗林公園と旧香東川の関係とその名残」、「こんなにも水々しい! 栗林公園」、「栗林公園の剪定」。どうしても自然系のものとかブラタモリ系のものになってしまいました。

学生のみなさんが考えたツアーの例

- ・「実は香川県には火山があった!?! ~栗林公園にある石の秘密~」
- ・「水が作る栗林公園 ~伝統ある日本庭園へようこそ~」
- ・「栗林公園と旧香東川の関係とその名残」
- ・「こんなにも水々しい! 栗林公園」
- ・「栗林公園の剪定」

当初案には、「各売店のおすすめ料理」、「訪日客の感動ポイントとその理由」なども…

当初案には「各売店のおすすめ料理」とか、「訪日客の感動ポイントとその理由」といった少し変わったテーマがありましたけれども、最終的にはこのような形で皆様、内容をまとめてくれました。そのリハーサルを一回ずつ行ったところです。

リハーサル現場の様子をご覧くださいます。3人が1組になって残りの学生さん達をお客様役として行いました。資料を用いた説明もありました。栗林公園の中を巡りながら「これは安山岩ですよ」、「溶岩の跡がここにありますが」などと説明をしていました。また、こちらの写真は、何気ない所なのですが、歩いてみるとこんもりした所に丸い小石がコロコロと転がっているのですね。「これ何と意思いますか」と質問し、私も分からなかったのですが、「実はここに川が流れていた跡なのです。川があったからこそ、このような丸っこい石がたくさん溜まっているのです。それが栗林公園の中に見られるのです。ここは旧香東川が流れていた後なのです」と言った話をしてくれました。



リハーサルを通じて特に良かったと感じた点ですが、興味を持ち自分達で調べ、「こんなことで面白がらせてみよう」と思ったチームの人達は非常によく調べていました。なおかつストーリー立ったプログラムを作っていました。日本庭園や栗林公園の特徴をとらえたプログラムには「お客様を楽しませよう」という意識も感じられました。一方、お客様に対するコミュニケーションですが、授業の中で「お客様にどのように接するか」、

リハーサルを通じての所感(よかった点)

- ・大変良く調べてストーリーだったプログラムを作ったチームもあった。
→ 日本庭園や栗林公園の特徴を捉えた流れのあるプログラム。
- ・お客様を楽しませようという意識も感じられた。
- ・ガイド技術(お客様に対するコミュニケーション、説明する技術)については、経験者のうまさが目立った。

「その話し方はどうすれば良いか」などガイド技術についての話をしていませんでした。これもあって、例えば、「アイコンタクトをしていく」とか、「声の大きさを変える」などといった技術ですが、何人かいた経験のある人達のうまさが目立ちました。

プログラムの中で非常に面白く作って来たものを一つ紹介します。女性3人組の水をテーマにしたプログラムです。ここは栗林公園の奥の方にある吹上庭の吹き上げという所です。ここからスタートします。ここが水の湧いている所です。今ではポンプアップしていますけれども、かつて水が湧いていた所です。彼女達は「栗林公園の特徴って何だろう」ということから話をしていきます。そもそも日本庭園には枯山水や池を巡るタイプなどいろいろあって、その中に池泉回遊式といって、池の周りを歩いて廻るタイプがあります。このように日本庭園の中でも栗林公園は水の役割が非常に大きいのです。大きい湖があって、お客様を乗せて和船が巡るなどの体験プログラムがあったりします。その水に着目して「水がどこから来て、どこに行っているのだろうか」ということから、まず水が湧いている吹き上げという所に行って「この



水がどのような水で、どのぐらい流れているのか」ということから話してくれました。

口頭で温度を伝えるのではなくて、実際にこのように流れてきた水に手を浸けてみます。今の時期は温かく感じるのです。私もなぜこのようになっているのか分からなかったのですが、水温が年間を通じて18度から20度ということで、非常に温かいのです。

その水の温かさを体験してもらいながら、「この温かくてきれいな水があるからこそ、少し専門的な言葉になりますけれども、ウチゴケとかベニマダラといった藻が生育しているのですよ」と説明します。「栗林公園の中でもここに見られる藻ではないのですが、このような藻がここに生えているのですよ」と気付きを提供します。

さらに、「この温かい水だからこそ、本来であれば5月頃に咲くカキツバタが2月下旬に咲くのです」と言うような話をします。写真を持っていますね。今この場では見ることができない違う季節の魅力を写真で説明します。

鯉が集まっています。「鯉がどうしてもたくさん集まっているのか」、「特に寒い時期だと、吹き上げから流れてくる水が温かいから集まってくるのですよ」と言うような話をします。

さらに、この話から今度は日本庭園に付きものの鯉の特徴や生態に発展していきます。「少し細かい話になりますけれども、実は鯉には胃袋がないのですよ」とか。そういった話をしながら、鯉が生きる条件。さらには「この栗林公園に鯉ヘルペスが数年前に発生して、全ての鯉が排除されました」といった栗林公園での出来事などを水の流れに沿って歩きながら解説して行きます。

最後に、歩いて来たコースを振り返って眺めることができる高所に来て、「ルート全体を通して栗林公園にどうして水が重要なのか」をまとめとして話すというプログラムです。30分のプログラムを数分でお話しているのだから、なかなか私のつたない説明では魅力を伝え難いのですが、栗林公園のボランティアガイドさん達の解説とはまた違った視点でプログラムを作っていたのがとても印象的でした。



明日と来週が本番です。リハーサルでの良かった点を先ほどお話ししましたが、改善点としたら、いろいろ本などで調べてきてはいますが、時代もあるのでしょうか、WEBで調べて明らかに間違っている知識を「こうです」と自信を持って言っている場面がぼつぼつ見られました。ネットの情報は玉石混交なので、やはりそこは原本に当たるとか、専門家の話を聞くなどして正確に調べておくことが大切です。また、専門的な用語を使うこと

リハーサルを通じての所感(改善点)

- ・WEBなどで調べた明らかに間違った知識を解説している事例が少なからず見られた。
- ・専門用語を使うことで解き明かしをあいまいにしている事例も見られた。
- ・「お客様に伝える」という意識が希薄な事例もあった。特に、お客様に対する興味の喚起(問いかけで考えさせる等)は大いに改善の余地があった。

ことがそれらしく見えるということで、専門用語を用いて話をしているのですけれども、その専門用語自体が間違っていることがしばしば見られました。「ガイドするのだったら事実関係をしっかり確認しようね」ということから入って行く必要があります。私は民間のガイド事業者としてお金を頂きながらガイドをしているので、お客様に伝えるということをしっかり意識しなければなりません。自分が話すだけで理解もされない、楽しまれもしないものはお金を払っていただく価値がありません。「授業だからということで、調べてまとめて発表するのではなく、きちんとお客様に対して伝えるということを意識して、伝わるように資料を作るなど話し方やプログラムを考えて来て下さい」と言って、明日からの本番を楽しみにしているところです。

ということで、私はエコツーリズム論という授業を始めて担当させていただき感謝しております。実際に学生さん達と行って見て思ったのが、エコツーリズム、インタープリテーション、コミュニケーションという学習はもちろんですけれども、それに加えて今回の水の話もそうですし、没にはなりませんが、「土産店の売り上げナンバーワンの理由を探る」など、なにげなく見過ごしていたものの価値を見付け出すという視点を持つ

エコツーリズム論を通じて

エコツーリズム、インタープリテーション、コミュニケーションの学習に加えて…

- ・なにげなく見過ごしていたものの価値を見出す。
 - 物事に背景にある歴史や事象を、ある視点から掘り下げていくことで、付加価値を生み出すことができる。
 - 地域活性化における地域資源の多角的な活用

つということがすごく良いのではないかと思いました。よく「地方や地域、俺達の町には何もない、村には何もない」と言われます。しかし、それは見方によります。「地域振興・活性化ではよそ者、若者、馬鹿者の視点が必要だ」と言われるように、別によそ者、若者、馬鹿者でなくても、自分の中にいろいろな視点を持つということが出来るわけで、どのような視点を持って見るかということです。今回はできるだけマニア向けの視点を持つということにしてもらいましたが、その視点の持ち方を自分の中でいろいろ仮定して、例えば、園芸マニアでも良いですし、自然マニアでも良いですし、栗林公園コスプレとかそういうマ

ニアでも良いと思うのです。いろいろな視点を持つことで付加価値を作っていく。そういう訓練になっているのではないかと思います。特に経済学部で地域振興・活性化ということを見ると、その何気ないものに視点を変えることによって付加価値を生み出し、地域の振興・活性化に繋げて行く訓練として、このエコツーリズム論が有効ではないかと思えます。なおかつ、お客様を意識してガイドをしてみるとということが役に立つのではないかと感じた次第です。

長時間になりましたけれども、これで私の発表を終わらせていただきます。ご清聴をいただきまして、ありがとうございました。

[本城]

横山先生、原先生、ありがとうございました。それではただ今の講演に関しまして、質問等がございましたら、どうぞ挙手をして質問をお願いします。何でも結構でございます。

[質問者]

面白い話をありがとうございました。ガイドをする上でも専門的なことを分かり易く、お客様に伝えないといけないと思うのですけれども、僕らも自分の研究で専門的なことを伝える事があるのですが、分かり易く伝えるために何か気を付けていることとかコツみたいなものがあれば、教えていただきたいと思えます。

[横山]

はい、ありがとうございます。ガイドをする時に分かり易く伝えるには、話す内容にもよりますが、相手を想定して話すことです。一般の方に話すのであれば、中学生ぐらいでも分かる言葉づかいで話すということを前提にして考えると良いと思えます。テクニカルターム、専門用語とかをできるだけ使わない。使うのであれば、中学生でも分かる言葉に言い換えて一度解説するということがポイントになると思えます。また、解説するというと慣れたガイドほど陥り易いのですけれども、しゃべるばかりになりがちなのですね。私はガイド養成の講師をやっているのですが、その時に紙に丸や三角、四角などをいっぱい書いた図形を言葉だけで相手に伝えるというゲームをしてもらっています。これが結構難しいのですよ。簡単な図形でも言葉で説明するとなると難しい。知っている人ほど自分の頭の中にイメージが描けているので、言葉だけで伝えようとしてしまいます。やはり簡単なものであっても、分かり易く伝えるには小道具や資料を準備されると良いと思えます。

[本城]

他にございませんか。

[西川様]

兵庫県水産技術センターの西川と申します。大変興味深い話をありがとうございます。本日の多田先生のご挨拶の中で、世界で行っておく場所に瀬戸内海が入っているということで、意外というか、そんなに瀬戸内海が魅力的なのか。もちろん魅力的だとは思いますが、でも、「日本で瀬戸内海だけが世界のトップテンに入るほど魅力的なのかなあ」と思ったのです。ガイドの方から見て、特に外国人にとって瀬戸内海が魅力的に見える要素にどのようなものがあるのか、教えていただけたらと思います。

[横山]

そうですね。日本人にとって瀬戸内海は当たり前の景色のようですね。しかし、昔から瀬戸内海に外国人も着目していました。私は国立公園業務をやっていたので、その関連の話をさせていただきます。日本には国立公園が34カ所あります。国立公園には大きくは自然公園という枠組みにあって、国立公園、国定公園、都道府県立自然公園があります。国立公園はその自然公園の中でも、日本の風景を代表し、世界に「これが日本の自然です」と言える所が国立公園として指定されています。その中に瀬戸内海国立公園があります。瀬戸内海国立公園は日本で最初に指定された3つの国立公園の1つです。最初に国立公園に指定された理由は今とよく似ていて、インバウンドに来てもらうという理由だったのです。高度経済成長の頃から自然・風景の保護がメインになっていたのですけれども、法律が作られた昭和6年当時は海外からいっぱい観光客を呼んでお金を儲けようということで指定されました。その当時は岡山、広島、香川が国立公園の区域だったのですけれども、その中にあった多島海、たくさん島がある景色ですね。今、瀬戸内海全体で周囲100m以上ある島が750ぐらいあると思いますけれども、そのような多島海景観というものが、実は世界の中でもかなり貴重だということと、多島海だけでなく、いわゆるインランドシー、内海になっている穏やかな景色とそこに育った文化です。昔の瀬戸内海は外航のルート。瀬戸内を通過して都に行くという点で文化の交流の地でもあったので、しまなみ海道や大三島などには国宝がいっぱいある神社があったりします。それから1970年頃に「インランドシー」と言う英語の本が海外に出ていて、日本に行きたいという人にとって結構バイブルになっていたそうです。この前、アレックス・カーさんがそのようなことを言っていました。少し話が長くなってしまいましたけれども、多島海景観と文化、日常生活の人と自然が共生している文化というものが世界の中でも非常に素晴らしい資質を持っていると思います。

[本城]

他にございませんでしょうか。

[岩本様]

香川大学名誉教授の物理学専門の岩本と申します。大変面白いお話、ありがとうございます。

した。学生が何かを説明するというはとても大切なことですが、学生はプレゼンテーションが上手くないですね。特に卒業研究発表とか、重要な中身があるものを伝えたことがないので基礎から始めないといけなくて、このような授業は本当に役に立つと思います。問題は「その中の知識をどのようにして得るか」と言うことで、本などもかなり間違っていることがあるので、正しいことを吸収することが難しいですね。特にWEBなどはもう何でもありで、なかなか難しい状況です。簡単に情報を手に入れることができますけれども、信ぴょう性はまちまちです。そういう意味で「どのように知識を得たら良いのか」と言うことです。

それから、お客様からお金をもらって楽しんでもらうということは、我々のように授業を行う者にとって、授業料を払ってもらっている学生さんはその意味でお客様ですね。必ずしも正しい表現ではないかもしれないけれども、楽しんでもらうということは、きちんと分かってもらうということになりますね。それこそ授業はガイドそのものではないかと思うようになりました。

それから、先ほど瀬戸内海について質問がありましたけれども、例えばリヒトホーフェンやトラベルチェックなどを作ったトーマスクックなどが瀬戸内海を見て「世界でもこのような所はない」と感銘しています。そういった意味で外国人が見ると、かなり印象深い場所だということです。先ほど島の数をおっしゃいましたが、全部合わせると確か3千ぐらいあると思います。このような所は世界を見てもなかなかないということで、非常に重要な所ですね。私も20年以上アメリカの大学に行って返って来ましたが、特に東京に行くところの良さが分かるのですね。ここに住んでいると当たり前で、例えば、栗林公園や屋島というと幼稚園の遠足に行く所ではないかと皆馬鹿にしているのですけれども、実際に離れてみると非常に良いということで、栗林公園などは楽しみな所になりました。特に外国に行って帰ってくると、まず行くのは女木島などですね。小豆島も外国にないような所です。いろいろ風光明媚な所にも行きましたが、ヨーロッパや南アフリカなども良いけれども、それに比べても全然引けを取らないですね。ところが、地元の人がそれを認識し難いということがあるのです。そこが難しいですね。

[横山]

正しい情報というものは難しく、学者の先生方の間でも意見が違ってくるようなものがあります。特にジオの話など、今回、学生さんにやっていただいて「それ違うよね」と言ったら、「いや、ネットに書いてありました」と言うのです。「ネットに書いてあるから正しいわけではないのだから」ということから話をしました。先ほどの学生もそうですけれども、専門、自分が研究している分野は自分が検証した結果であればまだしも、そうでないものは出典をある程度言って話をすることが大切だと思います。

お話をいただいて思ったのは、私も初めて来た時に屋島は「何か普通に平らな所だな」というぐらいのイメージしかありませんでした。ところが、先ほどの長谷川先生のジオガイド

講習を去年から受けたのですね。そうすると、「ああ、ここはすごく面白いな」と思うようになりました。長谷川先生が「香川県をさぬきジオパークにしよう」とおっしゃっていることに納得しました。やはり「自分の地域について良く調べてみることで地域の価値を再認識する良いきっかけになる」と今回の授業を通して感じました。すみません。私も感想になってしまったのですが、ありがとうございます。

[本城]

ありがとうございます。他にございませんでしょうか。

では、私から。今、香川県でエコツーリズムが盛んな場所というのはどこでしょうか。もう一つは、四国全体ではどういう所があるのでしょうか。

[横山]

そうですね。香川県でエコツーリズムが盛んな場所は。

[本城]

まだないのですか。

[横山]

でも、香川県ではかがわ里海大学の中で海ごみのツアーや生き物観察などを行っています。ガイド養成も行っています。そのような所はあります。これらは良い取り組みになるのではないかと考えています。あと、四国では四万十などが多いですね。やはり高知の方がサンゴ礁や四万十川があり、また、ホエールウォッチングなども行っているので盛んだと思います。観光とセットになっている所が多いので、旅行先という所が多いかもしれませんね。

[本城]

その四万十の方でインタープリテーションを行っている人達はある会社に雇用されているのでしょうか。それともボランティアなのでしょうか。

[原]

雇用されていないです。

[本城]

雇用されていないわけですね。ありがとうございます。

他にございませんでしょうか。

[横山]

今のお話で、やはり雇用というものが何かにつけて大切になってくるけれども、これにはいろいろな考え方があって、「兼業や副業の中で一つの生業、小商いとして行うという手もあるのかな」と思います。今、自分が三豊で実際に地域のガイドを行っていますけれども、これだけで食べて行くことは相当厳しいです。要するに無理だと思うのですね。でも、少し他の仕事もしながら週末だけガイドをするというようにすると、例えば1日ガイドで2万円とかですが、このようにすると収入の助けにもなるし、地域の活性化にも繋がってくると思います。雇用関係がなければ保険とかいろいろな問題もありますが、そういうことで雇用関係がなくても個人でやっていける仕事ではないかと思っています。

[本城]

博物館などでも、そのようなボランティアをしながら、少しお金をもらってやっている人達もいますよね。

[横山]

ぜひ、たくさんもらっていただければと思います。

[本城]

やはり、そのあたりは給与というか、そういったものが上がってくると良いと思うのです。

[横山]

そうですね。欧米諸国などではガイドさんの社会的なステイタスも高いし、給与も高いそうです。でも日本ではそのようなものは安くて当たり前というところがあって、環境省の施策もあるのですけれども、ボランティアが自然ガイドをするということを前提にしていますので、そこはやはりきちんと稼げる仕事になっていくべきだと思います。特にこれからはインバウンドの方々がたくさん来るので、そのように思っています。

[本城]

ありがとうございました。他にございませんでしょうか。

[横山]

学生さんからは何かないですか。

[榊井様]

香川大学農学部の榊井です。「エコツーリズムを行うのに当たって、何もないところに価値を見出す」ということをおっしゃっていたと思います。ですが、その何もないと思われて

いる所は山奥から都会まで含めて当然日本全国にあるわけで、乱立する可能性だってあると思います。そういった時に「ここに来てもらう」と言うことに何が必要な要素だとお考えでしょうか。

[横山]

ありがとうございます。何もないのではなくて、「何もない」と言われている所、地域の人達が「何もない」と言っている所に、見方を変えればいろいろな価値を作り出すことができるという話をさせていただいたつもりです。ですから、そこには何もない。例えば、「観光名所的なものはないけれども、このような面白い生き物がいるとか、歩きやすい森があるとか、切り口を変えることで資源が生まれる」ということをお伝えしたかったのですね。

もう一つは来てもらうことがすごく大事で、今、私が三豊で地域のガイドを行っています。その地域に400年以上続いている麴や味噌、お酒に使う麴を作っている集落などがいまだにあるのです。200年前の木の樽でお酢を作っているお酢屋さんなどもあるのです。このように他の地域にないものが一番のポイントなのです。これは結構いけるのではないかと考えてガイドをやっています。地域の資源を見付け出す。できればその地域にしかないもの、オンリーワンのものですね。

それと、「これを誰が楽しむのか」というターゲットの問題があります。例えば、麴の集落であれば、一般の方は「へー」くらいですけども、発酵食に興味のある人達などであれば「ぜひそういう所を見たい」と思ってくれると思います。そのように「興味を持っていただけるターゲットに、どのようにうまく繋いで情報提供をするか」というところが一番大事です。「例えば、三豊で今一番人気のあるものはなにかご存知ですか?」「日本のウユニ塩湖って聞いたことがないですか」「ないですか」「まだ少しマイナーでしたか」。皆様よかったら父母が浜を検索してみてください。父母が浜は日本のウユニ塩湖といわれており、インスタ映えする写真が撮れるということで非常に多くの人々が来ています。一昨年が26万人。去年が40万人以上と、すごい増え方をしています。このように他にないものがあると人は来てくれます。けれども、人が来るだけで、あまり消費に結び付かないとか、昔ながらの団体観光になってしまうのです。ですから、例えば、そこに発酵食のようなマイナーだけれども、興味のある人が高いお金を払って来るようなものを作り出して、質の高いものにしていくことが大事だと思います。来てもらうためにここにしかないものを、そして、興味を持つ人に伝えていく。しっかりと情報提供していくというプロセスが大事で、私もここが一番苦労しているところです。すみません。あまり答えになっていないかもしれませんが、これでよろしいでしょうか。ご質問、ありがとうございます。

[本城]

もう一つほど、ございませんでしょうか。

[横山]

先ほどの話ですけれども、今、東北で人気のあるツアーにコケツアーがあります。コケをひたすら見るツアーです。5,6年前に私の前の職場のピッキオに研修に来た人達がそれを作り出したのです。コケだけを見て、奥入瀬とかで数百m進むのに3時間かかるとかです。そんなツアーなのです。でも、コケの世界って、ルーペを使って見るときれいなのですね。男性にはあまり受けませんが、女性は美しさをじっと見るのがお好きな方が多いようで、それを売り出したところ、かなりの人気になっています。今やコケガールという人達が増えるなど、コケツアーが全国的に広がりを見せています。本屋に行ったら、コケの本がこの2,3年でいっぱい出て来ているのです。そのようにどこにでもあるものをこのような切り口で見せています。資源と見せ方の組み合わせでオリジナリティを作るということがすごく大事だと思います。私もコケツアーの相談が来た時には「こんなもの売れるのかな」と思ったのですけれども、今思えば、「一緒にやっていたらよかった」と思っています。

[本城]

横山先生、どうもありがとうございました。

[横山]

ありがとうございました。